

みらいのトビラ 

日本には「意地っ張りな怠け者」が多い

川口盛之助×デービッド・アトキンソン：日本の「真の国力」とは（その2）

構成：久我 智也 2016/07/27 00:00

日本のお国柄を定量分析した『**日本人も知らなかった日本の国力（ソフトパワー）**』（ディスカヴァー21）の著者である川口盛之助氏と、国宝や重要文化財の補修を手がける小西美術工藝社 代表取締役社長のデービッド・アトキンソン氏による対談の第2回。2020年東京オリンピックを前にして、さまざまなメディアで日本を見つめ直す企画が増えている。その中での日本は、規律正しく、誠実で、優れた技術を持った国として紹介されている。しかし、世界から見た日本は、本当にそのような国なのか。今回は、少子高齢化や貧困の拡大、インバウンド需要を題材に、日本が抱える課題をあぶり出す。

＊ 前回の対談は「**“財布を落としても戻ってくる国”という幻想**」



川口氏（左）とアトキンソン氏（写真：加藤 康）

後発国には真似できない日本の武器

―― アジアには急速に経済成長している国々があります。しかし、そうした後発の新興国は、文化面で日本に追いつくことは難しいと、川口さんは著書の中で指摘しています。

川口 日本は一般人の教養レベルが世界でもずば抜けて高い国なんです。これは、国際成人力調査（PIAAC）^{*1}の結果でも明らかで、平均点が最も高いだけでなく、上下の差が世界で最も少ないという結果は誇るべきことだと思います。国民全体の教養レベルをここまで底上げするためには非常に時間がかかります。

*1 国際成人力調査：OECD加盟国など24の国と地域が参加し、16～65歳の一般人を抽出して「読解力」「数的思考能力」など基本的な知識をみるテスト

確かに、日本に追い付こうという勢いで経済成長している国はありますが、そういった国々は、国全体のソフトパワーを伸ばすことまでは手が回らなかった。その分、エリート教育のような形で、少数精鋭に絞って予算を投下し、短い時間で結果が出る分野を伸ばそうとしている。例えばスポーツなどの分野です。

でも、多くの分野で世界の最先端に通用するソフトパワーを生み出すためには、様々な分野で才能のある人を許容し、愛でて、養う余裕（パトロンシップ）が社会全体にないと難し

い。社会にそうした余裕を持たせるためには、お金にならない分野も含めて、国民全体を育てなければならないんです。

日本より後に豊かになった国は、豊かになるにつれて急速に少子高齢化が進んでいく。これから伸びてくる国は、自国のすそ野を広げる前に自らの高齢化に追い付かれるという宿命があります。つまり国の栄枯盛衰のサイクルが短くなっている。そういう意味で、後発の国々はパトロンシップの精神が生まれにくく、文化の面で日本に追い付くことは難しい状況なんです。

アトキンソン おっしゃる通りだと思います。ただ、今の日本には1つ問題がありますよね。それは、貧困率が上がっていることです。

ここまでのソフトパワーを持っている先進国でありながら、貧困率がこんなにも高いという国はほとんど例がありません。貧困率が高まると格差が広がり、日本の武器の1つである平均的な知力の高さが失われてしまいかねない。

確かに社会全体がパトロンシップを持つことで世界に通用するような人が育ちますが、そればかりでは「農民のいない貴族社会」のようなものになってしまう。このままでは、国のシステムが崩壊してしまいかねません。

川口 そうですね。日本では、歴史的にこれまで積み上げてきたことの勢いで今の社会が動いています。積み上げてきた力は一朝一夕に真似できるものではないですから、そのありがたみをもう一度見直していかなくてはならない。

アトキンソン 日本は昔から資源がない国だといわれています。でも、逆に言うと、資源がある国は世界にほとんどないんですよ。自分の国の中だけですべてをそろえることができ、輸入に頼らずに済む国は本当に少ない。そんな中、日本は人間しか資源がない国ともいえるのに、ここまでやってくることができたんです。国際的な文化力の高さは川口さんの本で定量的に証明されていることなんですから、データで示された日本のソフトパワーをビジ



川口氏の著書『日本人も知らなかった日本の国力（ソフトパワー）』（ディスカヴァー21）

ネスに生かさなくてはならないですね。

「意地っ張りな怠け者」の存在が日本の成長を邪魔する？

——「資源」という意味では、日本は観光資源を生かした観光立国を実現しようとしています。特需ともいえそうな最近の訪日観光客のインバウンド需要の増加には目を見張るものがありますが。

アトキンソン そうですね。しかし、実際のところ日本はその観光資源をまだ生かせていない。観光の分野では、日本は世界で22位とか23位のランクとされています。こんなに資源があるのに、こんなに海外から人が来ない国というのは逆に奇跡的なんです。

世界遺産に登録されれば勝手に観光客が増えると思っているのか、観光地の情報発信の仕方もでたらめなことが多くて、十分にその力を発揮できていません。これは、日本が高度経済成長の追い風に乗っていた時代の名残だと思います。



デービッド・アトキンソン。小西美術工藝社 代表取締役社長。1965年英国生

まれ。オックスフォード大学で日本学専攻。アンダーセン・コンサルティング、ソロモン・ブラザーズを経て、1992年にゴールドマン・サックス入社。日本の不良債権の実態を暴くレポートを発表し、注目を集める。1998年に同社マネージングディレクター、2006年同社パートナーを経て2007年退社。2009年に小西美術工藝社に入社し、2011年から同社会長兼社長に就任。（写真：加藤 康）

川口 世界遺産については、問題視しなくてはいけないところがあると思っています。なぜなら、世界遺産への登録自体が目的になってしまっているからです。

富士山のように分かりやすい観光資源はたくさんある。でも、“あるだけ”では心配になるわけです。「富士山くらいの山は、他の国にもたくさんあるんじゃないか」と。そうすると、国際ブランドとしての認証が欲しくなる。それが世界遺産で、次は世界遺産を取ることが目的化していくんですよ。試験で点数を取ることが目的化するのと同じで、これは割と東洋的な発想かもしれません。中国や韓国も似たところがあります。

例えば、「世界遺産の登録数で世界一を目指そう」という目標を掲げれば、その目標に対しては素直に頑張ることができる。けれど、本来は世界遺産に登録されたことをキッカケに多くの人に訪日してもらい、社会が潤って「めでたし、めでたし」のはずですよ。

そうはいつでも、「世界遺産登録の目的はお金もうけです」と言われてしまうとシラケてしまうというか、たじろんでしまうような部分が日本人にはある。結局は、登録する取り組みを目的化し、そのプロセスを究める「道（どう）」に近くなっていく。

アトキンソン 大事なポイントです。そもそも「道」という考え方が広がったのは明治以降のことです。例えば、私がやっている茶道は、明治以前は「茶の湯」でした。柔道も「柔術」でしたし、剣道も「剣術」だったと聞いています。

お茶を見ている、もともとは大変な意味があってできた作法が形式だけになってしまって、その意味が明治以降は忘れられてしまった部分もあります。川口さんがおっしゃったように目的を忘れているところがある。

よりシニカルに考えると、世界遺産を目指す目的が「怠けるため」になっているのではな

いでしょうか。本当はもっと磨かなければいけないことは他にたくさんあるのに、それをやりたくないから「世界遺産」という分かりやすいお墨付きを目指す。それさえ取れば、あとは黙っていても観光客がやって来ると思っているんですよね。要は、日本には「意地っ張りな怠け者」が多いんです。

人口が増えていた時代の日本であれば、「世界遺産になりました」というだけで人がやって来た。だから、観光地として整備する必要もなければ、訪問者が満足したかどうか、そこまで大事ではなかった。旅館ではチェックインの時間よりも少し早めに到着すると、旅館側の都合が優先されて部屋に入れない。逆にチェックアウトの時間になったらすぐに追い出される。食べる時間、食べる料理、寝る時間、起きる時間まで決まっていました。こうした対応に納得していない人がたくさんいても、かつてはそれを上回るお客がいたから商売として成立していたわけです。

アトキンソン 旅行のガイドブックを出そうという話になって、世界遺産の魅力を伝える解説文を依頼すると「なぜ自分たちが解説しなければならないのか」と協力を嫌がる専門家があります。「世界遺産なのだから来るのは当たり前で、むしろ光栄に思え。勉強して来い。私は研究者であって、観光客に解説するために給料をもらっているのではない」くらいに考えている。全員がそうだとは言いませんが、そういう人たちは相当数いますよ。

川口 要はバランスの問題なんですよ。例えば科学者だって、人や社会の役に立とうと思って研究をしてはいないですよ。本音では自分が好きなことを研究しているわけです。もちろん、最近では予算を確保するために研究の有用性をアピールして「人類の未来の役に立ちます」と言わなければなりませんけど。



川口 盛之助（かわぐち・もりのすけ）。株式会社盛之助代表。1984年、慶應義塾大学工学部卒、イリノイ大学修士課程修了。日立製作所を経てアーサー・D・リトルに参画。各種業界の戦略立案プロジェクトに広く携わり、同社アソシエート・ディレクターを務めた後に、株式会社盛之助を設立。国内のみならずアジア各国の政府機関からの招聘を受け、研究開発戦略や商品開発戦略などのコンサルティングを行う。morinoske.com（写真：加藤 康）

すごく尖った研究をしていて「相当にすごいらしいぞ」と尊敬される内容であれば、好きでやってもいい。どんな分野でもトップクラスに究めているような人たちは、研究自体が目的化しても構わないと思います。それは「雅（みやび）」なことです。そういう人たちは社会全体、あるいは国や自治体、企業の単位で養うべき存在です。そうした人たちをリスペクトの対象として社会が愛でることでソフトパワーが育ちます。

ただ、最近は“もどき”の人が多くなってしまっている傾向があるように思います。「あなたは、そこまで言えるほどではないでしょう」という実力のない人までもが、いかにもすごいという振りをしている。社会がそれを許してしまう風潮もある。

先ほどアトキンソンさんも言っていたように、全員が全員愛でられる立場、つまり貴族だ

けになってしまうと社会は立ち行かなくなってしまうよね。

- ・ 次回に続く (2016/08/01公開予定)

この記事のURL : <http://techon.nikkeibp.co.jp/atcl/column/15/317534/071100020/>

Copyright © 2016 Nikkei Business Publications, Inc. All Rights Reserved.

このページに掲載されている記事・写真・図表などの無断転載を禁じます。著作権は日経BP社、またはその情報提供者に帰属します。